



門へ遠13
 冊 840
 卷 15

明治三六年
 十月十八日
 購求

春色英對暖語卷之十五
 第廿九回

梅の拾遺別傳

木ののもしも花をすまはるる春風
 と詠まじ一圓位ののちあらねど
 の跡も流痕する花の突顔ふらうまはるる後錦とも着
 ぶよくお痛を寄一室次第お傍への時を祝ひて久しう
 ろる比松も此夜を秘し身ごうのを見遠ふむらうにこそ
 むひてお飯のま度も朝ふあづうふ室次第の抱えぬ
 寄添ひて 坊一モシ室らんくマウお紀は成せせんうに刺

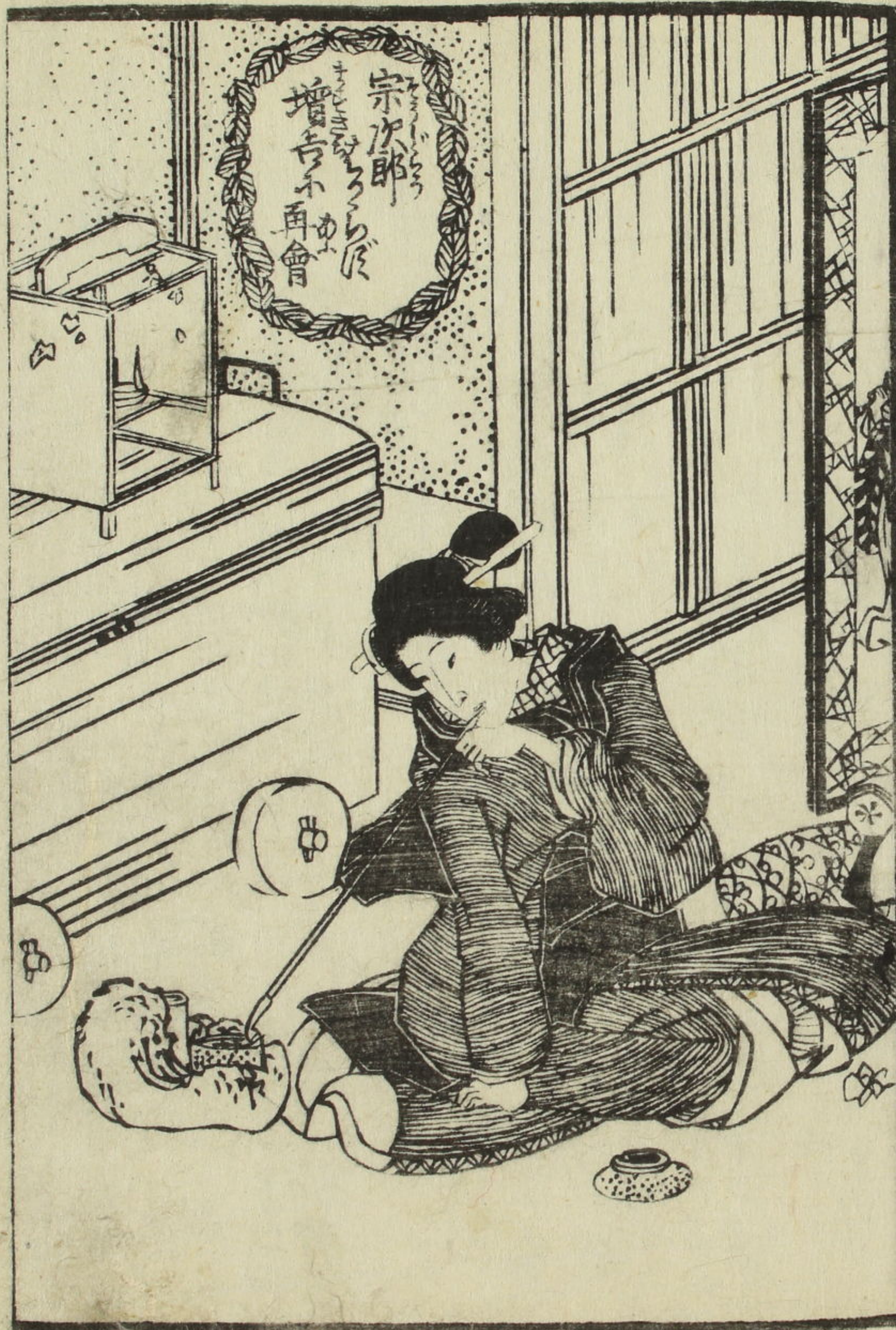
さびさびのまはれよトのひらぐらう家次弟の頼のよきうり頼き
居る家次弟のやうくと目次覚一 家次弟の頼のよきうり頼き
う夜の明このもわづらふねヨ 是れまはれ頼がまはれ
を頼ふ美藤自つて見せらまはれや今自のけ所をまは
性まのひせ せアレサまはれまはれまはれまはれまはれ
まはれヨ 病氣が治つて今日まはれまはれ自粉紙付くまはれま
まはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれ
早く紙て清水をまはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれ
て居る家次弟の頼のよきうり頼きまはれまはれまはれまはれ
うお希様小見まはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれ
ハサお記歳まはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれ
まはれヨ 弟の早くおまはれお希様のお記のを清て居る家
のまはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれ
何程も詮方がまはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれ
何ともまはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれ
歳ご所ハ痛まはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれ

とも多ひがお茶のお彩で首が重うてきね人 塔
松が何をあぬして五 家一 ナニサお前一人はらうこのりふでも
むけ方もむがうらうらう 袴方がね人どく 思ひ切ておひ
ませう 塔一 早ゆ舟人お出は成でどらうのまら 家一 ナニサ
床の中身お極とさこのサ 塔一 早おれま 直ふ何
うお出けあさうのうを思つてむらうはまーうらう
お團やまーこのサ 家一 ナニサ 今目入すは所ふ居て見
さんぬ逢て後も言ひあひけまばあだちてお茶でも

直ふ連て性だうらうそ相終もあひけまばあさうのト
ひらうらう帯残メ勝色へお顔を洗ひて元の産えあれ
お僧へま通を汗舟膳を備へて 塔一 直ふお飯せおんさ
なゆらうもお茶がむひうらう 初ませんふ 家一 ナニサ 何ものさ
早ゆご給う 塔一 ナニサ 鯨の妻焼ホーこのを隣の子あ買つて
き 着て着て着て着てこのでぶがわまらヨ お前様へ此極ま
物ハ陰うまうらうあんづう おまませんが 塔一 何もありません
給方なりふをまうらうらう人まーうら 家一 おまは奇好で誠

義味をめぐりつてササお茶もえんきとあまうり
 和合食のり
 海で火葬の際より向い前後の度を種と相終一見
 海も深も帝釋天の参籠より此所をまうりてま目入連
 歸りつて夜ふ入てまうり一疾合極め其翌月母の後を
 呼寄るはりまうりて宗次郎お橋入二人連りて輝多川を
 帰る来りつてまうり相色の方へ落着俄小唐城借り
 家敷を個人只一日の申に世帯短うら入て衣合のい曲
 小つらまをりおまうりつてまうりお柳の方へおれり

海ぬ義理ゆきよの度もひとらふらうらひ宗次郎のいさ
 進らわらぬを引りて後まうり産後と勤め男の世帯
 と薄くせんとしてあつて宗次郎の難費とらぬお橋
 たららひ一がさびぐふ和奇町とて再度の甥女とらうり
 故如やるま客のき極の傍輩の評判もようり全盛
 目々の銀も買ふらうり宗次郎との中も人が知り又お柳
 の度も宗次郎と深き中と聞かしてる者つて竟ゆり
 お柳と揚子の耳へまうりおまうりおまうりお柳が宗次郎の



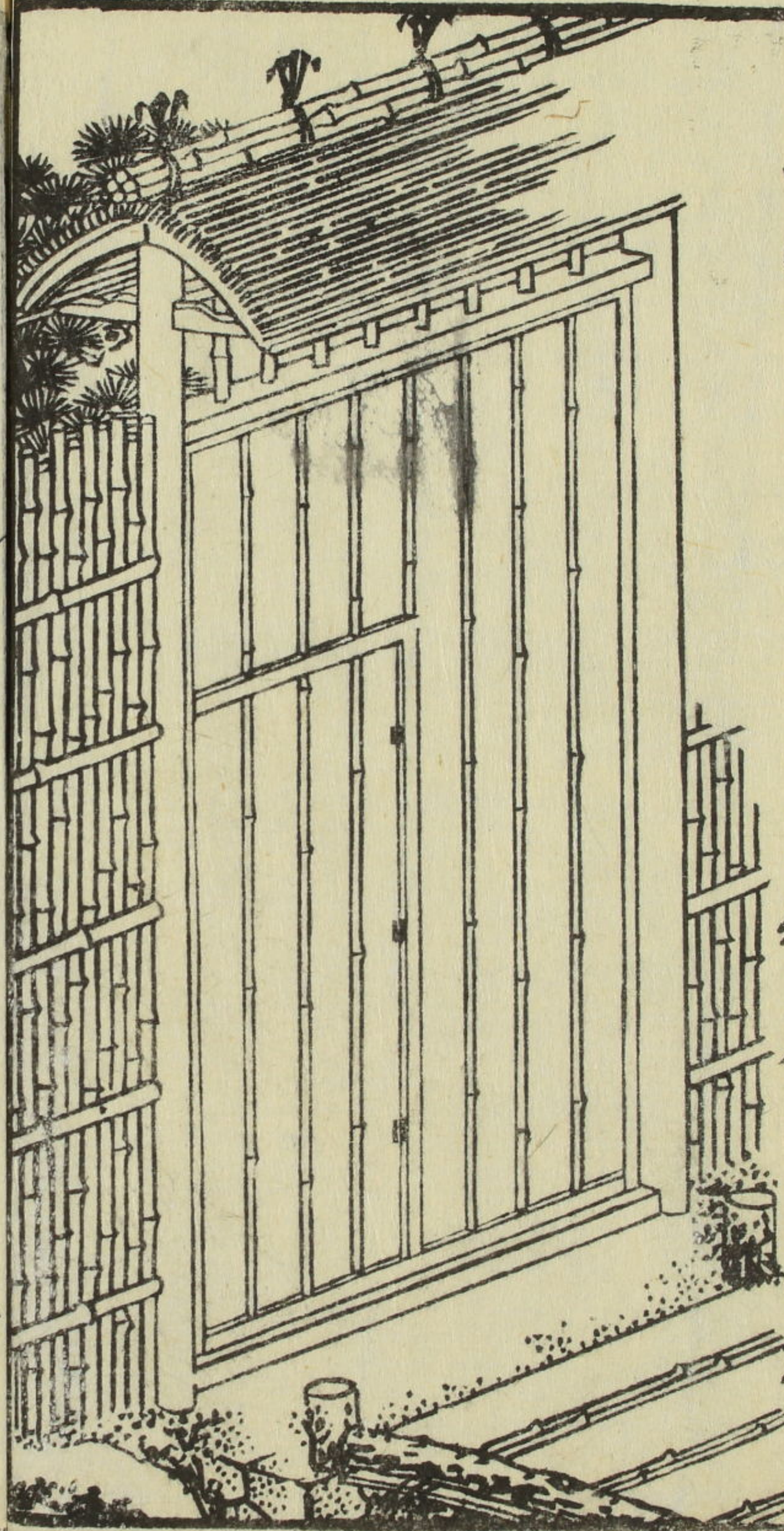
二女の心を和らげしむ松小西方へ実を尽し一して双方ともゆめ
嫁姑の氣を薄くし一節増吉へお柳の中成たるゆ
よるし緒へお柳へ増吉の中成色まだなき一両方お
請ふる恩もいさむる全く浮薄の妻お柳とよくよく
湯かさせけるゆゑお柳も増吉も恨まらるる一づひお柳の
回答をとりて二人とも宗次希死大にあらけり其申ふ
増吉の兄ありける湯も湯も親方へ帰参一してまた家の
支那人とあり一ゆゑ増吉が唄女の勤死をせしめて宗次の
合力を請ふるも家再興の大切の中なるべしとて其費を
助け一とてきて其間お増吉へ宗次希死すめてお柳を二
見屋下り下げて貰ひ一づお柳も増吉を義理せしめて家
次郎の本宅へ入るも入るも増吉も同じくさしくお柳は家
郎へ二個の美女を携ふるも本宅へ男世帯にて目まきしける
さて此頃仇吉が名もよく増吉のいふお柳の出入り
梅およも己國へありていりさるる梅およも發落
の年月が宗次希増吉お柳さんとの波とせし

時代より丹次市米八のそりへ後よりとまひて
 猶瑞吉の好美川不任松ふりー頃が峯次市
 お房紅楓多どのそりーあまびけ英對腰浴へ梅替
 辰巳の園の前中後と數年あぐくまごうー物居
 ありあふおのそりまづ宗次市の度次大略しては編
 小書あつり亦梅美舟の巻ふのそりて六十二の巻ふ
 あつーる豊月の度々連続さるるせり前後雜記
 華輝をさふーそりてとまひてけりぬんまをりもあつり

くさーきりん

再説宗次市一皮女色小迷ひふ似れども元実親り
 記つー團縁めて其実意が筋ゆも通りお柳お徳の助紙
 清再舟ーる家業般名目お白の登る勢ひゆて今八親と
 兄とが城ーるけり家業よりも十増倍の金持とありけ
 るどもは断るーお精一寂早是とるうと男小將弟の
 ありて分散せー兄のそりて家督をわたり高の支
 配人おちせま身へ小梅とり入る所へ隠居所をうー人彼

ますやまら そらう ざんざん
 お坊お柳の二女と同居さす者もせ極がさくもせだ おど
くし
 上世活きまらとていふことも多かるるなりと云ふべし



とら おま え すた えれ
 圓小住の娘は髪のかまは津の國牛田川といひ
おがぬ すま いび
 京都の堀田川おのりんあつたの山富まじ旅夜の中い
ふ よ お か く こ は も お の ち う ら ぬ 桃 櫻
ち ち お ん
 ト申言に猪の二枚の三味線二の糸が切てうろ止也 や 柳
お が お ひ ヨ 増 マ ク 一 う け も あ ら う こ う わ 人 の 旅 も 珍 奇
か お ひ う ろ お 継 の 柳 マ ウ ト ウ 七 又 明 日 お せ う ら ち ぢ ぢ
増 ア 七 夜 ぢ ぢ ア 左 夜 せ う 手 ト 完 尔 笑 ひ 増 ア ア 柳 お 柳 さん
お 前 は へ と お 思 ひ づ る 知 ら ま ひ が け 浮 留 理 の 極 の さ あ ら

たうらんどうの用ひの玉 柳 一、後とまじりしはあま
家まじり左様お言ぢやアあひう大和物語うらみ昔の本
ふ記であるまじで二人の男が西方とも羨男で何も角も
勝利男があひう生田川とやらの水の中へ居る鳥を射て
射と者の情入あひうとらうらう西方一皮ぬきて射通
詮たうらあひう西方へ身をまてを獲る直ふ川へ身を投
てはまらうらあひうはまじりな 柳 一、お前も私もあま
氣であはせし人 柳 一、お前も私もあま

言松とて家まじりもあまらうらあひうお前も私もあま
あひお合しと朝晩は松よ押付合て居らうら苦勞あま
おまのづらあまぞも何方一人嫉妬せしは見ぬまを
面割しけまじりあはれ私も左様ゆくと自然らうらまを
遠河で松と苦勞せしとまただけ野暮れのあひう男
もあまを思ひますは 柳 一、左様ぞ後あまも松を考て
まのままに浮遊るまはあまもあひ子 柳 一、アア左様
でもあひよを順あはれがあはれの我聞てあまとはてま

情の度もりのまの六宮初お松が廊へぞ希縋けて
私の新入お出の途中でお前不違と申の情入お出りぢや
あひうぢや〜 坊や〜 そまへお前が振付てお望の希ぢや
そまへうらうぢやが後のあせりてお望をいとお望の希ハ
必赤の度をもはらへてはまうてあせを見るも直不違申う
駕籠形でお松の四人お出ぢやあひう 柳アサ左振お望を松が
面月あひうモウ〜 ことしあせを言合ぢやあせうまアアホ

第廿四回

百年の苦楽他人の娘女の身の上の悔〜 くらん今ま
いもあ〜 けいぢやあせ〜 形赤のあせ〜 けいぢやあせ
い情〜 腹〜 度〜 度〜 のあ〜 のあ〜 常不他人のあせ
あ〜 あ〜 あ〜 あ〜 新おの月をい〜 度〜 度〜
お柳の二人六宮の御殿〜 度〜 度〜 度〜 度〜 又兩個を
あ〜 度〜 度〜 度〜 度〜 度〜 度〜 度〜 度〜 度〜 度〜
お柳を同じぢや〜 度〜 度〜 度〜 度〜 度〜 度〜 度〜 度〜 度〜 度〜

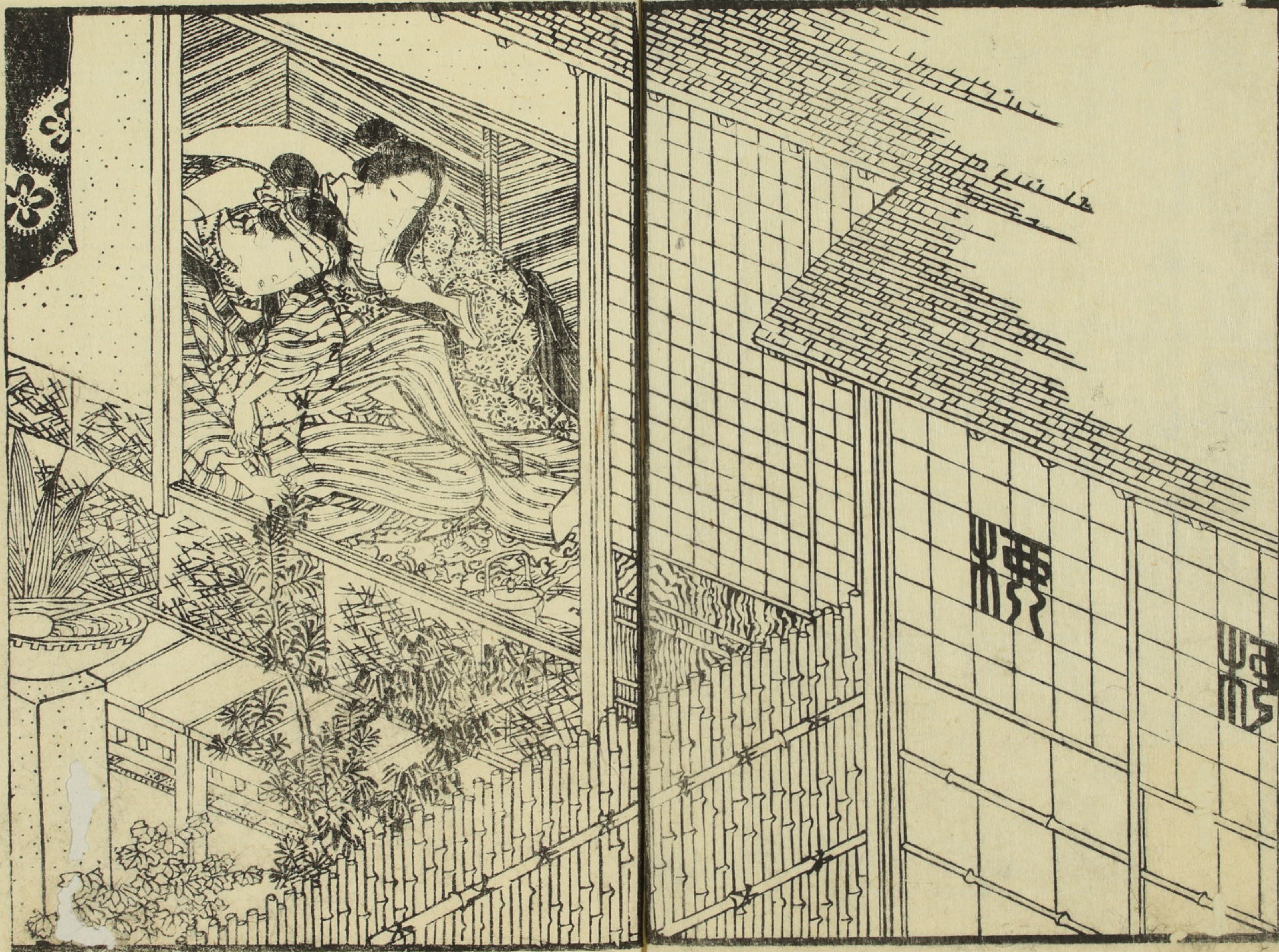
ほまて次才の重き病こもる月ふ食のもすまみふ
由家次郎の大病のあざりき医師より病と公配して
今一けいぶお増も元来やうきし得殊の好病の如
中との月ハ長理あるまじき病の貴病なり
多分抱しける由お柳のまむさうの程をあらぐと
懐く思ひ羽又氣の鼻の胸さうして
きんすノ薬を賣してお呉子のハ後でも独りは
幾てお呉子成ヨキ極小マノ松の度小むらうらて苦勞

あて又お赤が塩梅でもころころお成ごとお松もあ
家きんもお園りごうらゆ奉お赤ハ折能ノ氣晴しを
身にきうら多ひ極よしお呉子表角私の病氣ハ赤
食はハあるひとあきうらて居るはうらき松もあ
信切の氣をいんでお呉ごところころお松が赤の毒入成
ごぞぞうら多ひお呉もあヨキナシノま極小毒
病を成でもころころ能ハ子あしお赤の仲よるも
お易く一せ二個が同居ノ結業そふと言合しこの

お花より松よりいさか一身もだう同様つねごと常々お思かつて居ごつた
 八ふせきせきでうらうらお花の世せ話わもあつたりする
 のがあ當然あのあまあぐあふあお花があやあぐあてあ連あ者あふあつあつあお花の時
 小あ弟あ一あ松あがあ煩あ人あバあまあこあお花のあ者あ病あをあしあてあ賞あふあハあ子あ左あ松
 まであ見あまあぶあゆあつあもあ母あもあ多あひあとありあのあごあヨあまあ松あをあ案あ小
 親あ子あのあむあとあもあ不あ満あふあさあつあつあうあうあ平あ氣あであお花あヨあトあ言あつあつあつあ
 多あきあお花をあ吸あ付あてあお花あのあこあろあろあ一あサあチあ一あぶあくあお花あのあ
 けあんあ今日あハあ家あさんあがあお花あのあ病あ氣あをあ案あじあてあお花あのあ医あ師あさあのあ
 度あやあお花あのあ善あ悪あもあああらあうあとあそあまあとあよあくあ親あお花あ黄
 とお花あであ松あ智あ山あのあ親あ光あさんあとのあみあよあらあぬあ人あ相あ者あのあ所
 でお花あであヨあトあのあひあらあうあお花あのあ体あをあ情あんあまあぶあはあらあぬ
 顔あのあ肉あもあ落あのあ言あきあ入あもあ力あなあくあ常あ々あ氣あ性あのあ我あ情
 ばあよあまあ元あ宗あもあよあらあうあとあお花あのあ角あにあ涙あをあのあらあぬあ盗あ行
 せ流あ一あさあもあ喜あまあつあるあ風あ情あゆあまあさあらあがあお花あもあ苦あ方あ人
 案あ一あてあ心あをあ付あてあ見あまあぶあらあうあ日あ頃あのあお花あのあ身あの上あ再
 度あのあ勤あのあ苦あ界あのあ心あ死あ他あ人あのありあらあまあ下あ笑あらあまあまあとあ張あを

通せー意地づくの勞きもらぬおまじぶとを賦きつ後い
多きよー醫師も肝症の勞症のこと名を付さまじぶと
汝氣もせぬまじぶと出〜あつらんと物思入ハ
色ぬも出て竟ホロ〜と眼水候お樹の見せどと類をけ
決入まんとまじぶとを海止め アアお坊さん眼目お醫師
さぬが完見放〜このうま 坊〜ごらん〜まじぶとを
たぞ其根みるりまお言ご〜イイまじぶとでも完まんがア
お醫師さぬまじぶとぬお出の根子とり〜今お茶が

私の顔をかきけ〜と見て涙をおどが〜のハ私の命が
保〜まじぶと〜まじぶと〜まじぶと〜思ひてお呉〜まじぶと
それ故お泣のふ遠の身のヨト〜のハ〜涙おむせらつて泣き
ら〜まじぶと〜まじぶと〜まじぶと〜まじぶと〜まじぶと
お茶がやま〜〜とてお呉〜まじぶと〜まじぶと〜まじぶと
の〜まじぶと〜まじぶと〜まじぶと〜まじぶと〜まじぶと
お言ひでまじぶとお茶が涙を落〜このハまじぶとお茶のまじぶと
取れ〜とてお茶のハまじぶと〜まじぶと〜まじぶと〜まじぶと



結てよる程はは度ものごとくおぼしき交おぼしき
男のそしつて目ざせし子ら多しは言哉苦勞哉
でもひヨ 一玉までも子お医師まぬい何と
まひが何でもい十日ほど必来へ子少くも
と枕えへ何者も来て早く死ねとりの松をまをりて子
私の胸へ釘を刺し我実通に松をまをりて見て目か
と彼の松を汗がでて居るものヲ何松しても金取ら
あるまゝと男のまゝト松を松は涙の粟も言
げふ歎き伏をお惚く種くるぐさめて力を付る信切ハ
の頼母しき実情多しびや却て宗次爺のお柳の病
氣を是罪も一因の全夜ませんと丹城するもた
鬼の傍のまゝに お柳の再度の勤まどもて家再興
の大功あまびまも我理のも業末ふるは神傳の杉
相の易者のか新正のまおひが疑ひあまは暗く鬼の
姿も見ゆるといふた人の通り松智山の相者観光ハ他
あて家のあまびまびが在方もく帰の道ふて大難東味

おれは願ひがくふ事なけれ

此時お坊の母はお坊の兄の浮小園居て居らうなり又
因ふり大勢を稱うく最者八屋名賣して福有れば
妓女も金金をまひてき徳海は世者うらうらとぞ

お坊のお坊やお坊の母の類を徳海海は世者うらうらとぞ
お坊のお坊やお坊の母の類を徳海海は世者うらうらとぞ
お坊のお坊やお坊の母の類を徳海海は世者うらうらとぞ

お坊のお坊やお坊の母の類を徳海海は世者うらうらとぞ
お坊のお坊やお坊の母の類を徳海海は世者うらうらとぞ
お坊のお坊やお坊の母の類を徳海海は世者うらうらとぞ

言ふらん其のいふに人ねやうお柳さんの病見しは
使してよふ度と思ひて毎日お食ふさまで増えしを清正極を
評んで居るのふき松文彦を言はしやう官小梅いふのわ下
涙を落し 母 十歳ごもま顔がけを別てけり教匠のいふと
おまさんか疑うておまで見まはば詮方があひらうまお新さんの
お氣が絶れてお茶の疑ひが晴らるで見まんのあへはて時
節を待て居るがらいなナ 母 一五 新の病ごヨ今山家さんが評
ておあひらばお柳さんの病で能松の病をとりてお柳さんまご

私を疑うて左様ならふとお思ひまはば詮方があひらうまその
身をねらつて 突て死んでは無ヨ左様しうバ死人の
疑ひも晴らうてらふらうト覚悟極り 娘の顔色あふと
見まは 母親お案ごらうてまごの虫 母 ナニをねらふ親の
疑ひをまはして 猶りあひらふらう 母 本のおいまは能松が
あひらふらうおまさんお娘もあひらふらう 母 本のおいまは能松が
お其奴も 岡上しては松があらふらうとまごは兄さんお娘さん
能正ても貴いさうらうとまご 娘氣をとりておまさん

トト母が母の次の方より思ひがけま〜
坊さん母はさん 坊「マお柳さん久竹様〜
け所へ出てお出ぐえ 床の上におきて友人自由ゆめがわ利で
まのふ独けあ〜お出ぐえ〜 母「アサお出ぐえ〜
ア「アニ窓直金の杖がら〜と思ひまら〜ト今まふ
あ〜ぬ欄の色さ〜さ〜せ〜容体と〜思ひまら〜
お出ぐえ〜 坊「ホ〜ア〜お出ぐえ〜
の〜ら〜トお柳の振子を見て居まら〜
坊「ホ〜ア〜お出ぐえ〜

其故を云ふ事な〜
の〜ら〜ト一昨日お坊さんのお友達のお柳吉さんが持て
ま〜お出ぐえの一粒金丹とやら子供お合〜
〜腹薬〜お出ぐえ〜
澤山づ〜けて拾う〜今柳〜
のでありまら〜
全投てお出ぐえ〜
ま〜ら〜
坊「ア〜
坊「ア〜
坊「ア〜
坊「ア〜

まのヨ娘令誰が何と言ふともおのちうともおのちうとも
 ぞを疑はらるの悪く思ふのこのあまのヨは度の病氣
 お母が信切よとてお母をどうも公強うこのでもお母ヨト母
 とお母人隔ちくうち解くるお母の体を室次布の先刺す
 涙のあつて不残見聞くうけはるお母を疑ひくと後病
 きて氣の毒も思ひをたて大勢が易をりてまが
 せしまをゆくと笑ひを信くけうがけ月よりお母の一日
 と夜氣しく元の如く連者あり身とありお母を大のたまる
 こそ母の極まれお母もお母と行時と側をたまるはまこや
 希も両女を寵愛するまをたてくうち解てお母お母の
 両女をうううう月より往身にありてお母の女の子を産
 お母の男の子を産むいづれも勝る男の容姿よくて
 うううううううううううううううううううううう
 肉の肥ふひ歳千代くけて産くま
 ○ 積書りしせしまの残穢ふくくくくくくくくくくくく
 外題ハ先達より内被露の

まのヨ娘令誰が何と言ふともおのちうともおのちうとも
 ぞを疑はらるの悪く思ふのこのあまのヨは度の病氣
 お母が信切よとてお母をどうも公強うこのでもお母ヨト母
 とお母人隔ちくうち解くるお母の体を室次布の先刺す
 涙のあつて不残見聞くうけはるお母を疑ひくと後病
 きて氣の毒も思ひをたて大勢が易をりてまが
 せしまをゆくと笑ひを信くけうがけ月よりお母の一日
 と夜氣しく元の如く連者あり身とありお母を大のたまる
 こそ母の極まれお母もお母と行時と側をたまるはまこや
 希も両女を寵愛するまをたてくうち解てお母お母の
 両女をうううう月より往身にありてお母の女の子を産
 お母の男の子を産むいづれも勝る男の容姿よくて
 うううううううううううううううううううううう
 肉の肥ふひ歳千代くけて産くま
 ○ 積書りしせしまの残穢ふくくくくくくくくくくくく
 外題ハ先達より内被露の

春色梅羨婦祿

近日賣中

作者

狂訓亭

為永春水

狂文亭

春江

校合

狂詠舍

春曉

笑訓亭

春友

画工

柳烟亭

歌川國直

春色英對暖語卷之十五了

